発問例

●二〇一ページ

問 **◉「動作の表情」（7 行目）とは、どのようなことか。**

答 動作が、感情をよく表す顔のように、内部の心情を表していること。

補 直前に「顔の表情」とあるのと対照されている。

問 **「あひる」（11 行目）の描写は、ここでは、どのような効果を生んでいるか。**

答 「あひる」が頓狂であればあるほど、それと対照的に死が迫ったねずみの悲劇的運命を強調される効果。

補 ねずみの動騒は偶然近くにいても「あひる」にとっては他者の動騒でしかなく、したがって「死」は他者とは共有できないその個体特有のものである。この「あひる」の存在が全体の息苦しさを救っていることにも注意したい。

問 **◉「寂しい嫌な気持ちになった」（15 行目）のは、なぜか。前の部分の「寂しい」気持ち（一九七・5、15）と対比して考えてみよう。**

答 自分も、ねずみのように必死でもがくかもしれないという考えに、平静だった心を乱されているから。死を考えても親しみを感じるなど落ち着いていた前の部分の心情が、鼠の死に際を見たことで覆っている。

問 **「あれが本当なのだと思った。」（15 行目）の「あれ」は何を指しているか。**

答 死ぬに決まった運命を担いながらもねずみが殺されまいと、全力を尽くして逃げ回っている様子。

●二〇二ページ

問 **「それに近い自分」（4 行目）とはどのような自分のことか。**

答 ねずみと同じように死から逃れるために努力した自分。

問 **「しかし」（13 行目）は、どのような内容を受けているか。**

答 「死の恐怖に襲われなかったのも自分では不思議であった。」（二〇二・10）を受ける。

補 潜在的には死の恐怖があったと考えられる。そうした潜在的恐怖心に対する「しかし」であろう。

●二〇三ページ

問 **「あるがまま」（3 行目）と「　」をつけてある理由と、この部分の意味について考えなさい。**

答 「　」を用いたのは強調。これが生きるにあたっての原理だと強く意識している。意味は、あるとおりに、そのままということ。「あまり変わらない自分であろう」と考えれば、生き延びるために「ありのまま」の動騒を繰り広げるだろうという意味。

補 「あまり変わらない自分であろう」の部分は、「であろう」（＝だろう）という言葉遣いに注意しながら、「ねずみの場合と、そう変わらないのだったに相違ない」（1 行目）との対応関係から指導する。

問 **◉「両方」（4 行目）とは、何と何を指しているか。**

答 「気分で願うところ」と「実際」。

「気分で願うところ」は、自分の生命に関する事態に即して、こうありたい、こうあるだろうという心情、「実際」は、具体的に起こす行動のこと。

つまり、「気分で願うところ」は静寂な死のあり方、「実際」は、死に切るまで生きる努力を続けること。

補 ただし、「気分で願うところ」ついては、運命の違いによりもたらされる意識など、若干読解の余地が残る。

語句の研究

●二〇一ページ

2 魚串　魚を焼くときに用いる串。竹製のものと金属製のものとがある。ちなみに作者の日記には「竹クシ」とある。

7 顔の表情……動作の表情　ふつう表情と言

えば顔の場合に用いるが、作者はねずみの本能的な必死の動作を、生への一生懸命な願望の表れと見て、こう表現した。

8 それが一生懸命であることがよく分かった。

「それ」は「どうかして助かろうとしている」（二〇一・7）ねずみの動作を指す。

12 頓狂な顔　慌てた、どこか間の抜けた顔。同じ石に対して、あひるが頓狂な様子を見せれば見せるほど、ねずみの必死さが克明に浮かび上がる。また、あひるが「せわしく足を動かして」（二〇一・13）いることから、あひると「忙しくその脇をはい回る」（一九九・2）蜂とを接続して、生のイメージを意味づけることもできる。

15 寂しい嫌な気持ちになった。　次の二行にある「恐ろしい」という感じから発した心情である。完全な死に至るまではなんとか生きようともがく生き物の姿、死に至る推移（動騒）に対する「自分」の本能的な拒否反応を意識したものである。

15 あれが本当なのだと思った。　「あれ」は 14 ～ 15 行目の「ねずみが……逃げ回っている様子」を指す。

●二〇二ページ

4 それに近い自分　ねずみと同じように死から逃れるために努力した自分。

7 ～ 9 半分意識を失った……自分の問題だった。　「いちばん大切なこと」とは自分のけがの手当、自分の命を指す。また「しかも」（並列・添加の接続詞）は前文の「半分意識を失った状態で……よく頭の働いたこと」の不思議さと、自分の問題であるにもかかわらず、そのようにしたことの不思議さとを並列・添加する働きをしている。他人のけがの場合なら冷静に判断をし、援助の努力ができるのも当然だろう。しかし、自分に直接降りかかったけがに対して、しかも半分意識を失った状態で、冷静に判断できたことが不思議に思われたのである。

●二〇三ページ

2 それが今来たら　「それ」は「ねずみの場合」（二〇三・1）、つまり致命傷で死の宣告を受けたことを指す。「ねずみのようなことが起こった」（二〇二・3）ら、つまり自分のけがが「フェータルなものだともし聞いた」（二〇三・13）ら、という意味。

2 なおかつ、あまり変わらない自分であろう　「なおかつ」（副詞）はそれでもやはりという意味。「であろう」は「どうだったろう」（二〇二・14）「襲われなかったろう」（二〇二・15）などから、「だろう」（推量）と同じ意味と考えられる。「ねずみの場合と、そう変わらないものだったに相違ない」（二〇三・1）の対応関係に鑑みて、【あまり「ねずみの場合」と変わらない自分だろう】という意味に取りたい。

3 「あるがまま」で　「　」は強調。本文の文脈上、この「あるがまま」（言葉の意味は「そのまま」、「存在するとおりに」）は「自分は助かろうと思い、何かしら努力をしたろう」（二〇二・16）、つまりねずみと同様の動騒を起こすという意味に取りたい。

3 気分で願うところ　死ぬなら、ねずみのような動騒は起こしたくない、静かに死にたいと願う心情。ここでの「気分」は「実際」の相対語として用いられている。

3 実際にすぐは影響はしない　「実際」は死に直面したときの自分の実際の状態で、この場合は名詞。前項を受けて静かに死にたいと気分的に願っても、それが現実の実際の場面においてもすぐに影響し、自分の願ったとおりになるというわけではないという意味。

4 両方が本当で　「両方」とは「気分で願うところ」と、「実際」の二つをいう。「気分で願うところ」は、自分の生命に関する事態に即して、こうありたい、こうあるだろうという心情、「実際」は、具体的に起こす行動のこと。穏やかに静かな死を迎えたいという心情も、死を迎える前に動騒をおこすだろうという予測も、そのどちらもが嘘偽りのない真実

だという意味。

4影響した場合　自分の希望が実際（現実）の場面に影響を与え、希望したとおりの実際（現実）になること。

5それはしかたのないことだ。　主人公はここまで見てきた死から、「静かさ」に関わる「両方」の矛盾を「それでいい」とした上で、そのまま「しかたのないことだ」という言葉で語り、受け止めている。

注意する語句

相違ない…間違いない。確実である。（＊で用例を示した）

＊あの宝石は盗まれたのに相違ない。